

千鳥冷久しき泄痢とまりかね小便乏ふり足のはるゝに 千鳥よく五疳の藥精をます久敷行
歩叶はぬによし

〔古事記上〕此八千矛神、將婚高志國之沼河比賣、幸行之時、到其沼河比賣之家、歌曰、爾其沼河比賣、未開戶、自内歌曰、夜知富許能、迎能美許等、奴延久佐能、賣適志阿禮婆、和何許許呂宇良須能、登理叙、伊麻許曾婆、知杼理邇阿良米、能知波那杼理爾阿良牟遠、伊能知波那志勢多麻比曾、伊斯多布夜、阿麻波世豆逗比、許登能加多理基登母許遠婆、

〔古事記傳 十一〕宇良須能登理叙は、浦渚之鳥ぞなり、萬葉六十四に、納渚爾波千鳥妻呼、略註とよめる類を云、又七十四に、圓方之渚鳥浪立已妻唱立而邊近著毛、十一、三十四に、大海之荒磯之渚鳥、略中、これらの渚鳥は、一の鳥名の如くも聞ゆれど、ふは、推當の説なりとい、今此の歌、詞と

照して見れば、たゞ洲に在鳥なるべし、略中、伊麻許曾婆、知杼理邇阿良米、略註、千鳥は、書紀瓊々杵尊の大御歌にも、播磨都智耐理とよみ賜ひ、日代宮段歌にも見えて、古歌に常多くよめる鳥なり、然るを字鏡にも和名抄にも、さて此は上の浦渚の鳥ぞを承たるなれば、今こそは浦渚鳥

なり、此鳥の見えぬはいぶかし、ならめと云意なるを、歌の調さは云難き故に、言をかへて千鳥とは云り、

〔日本書紀 神代〕一書曰、中豐吾田津姬、恨皇孫、瓊杵尊不與共言、皇孫憂之、乃爲歌之曰、憶企都茂幡、陞爾幡譽、辰耐母、佐禰耐據茂、阿黨播怒介茂、譽播磨都智耐理譽、

〔古事記 神武〕爾大久米命、以天皇之命、詔其伊須氣余理比賣之時、見其大久米命、黥利目而思、奇歌曰、阿米都々、知杼理麻斯登々、那杼佐那流斗米、

〔古事記 中〕於是化八尋白智鳥、翔天而向濱、飛行、智守爾其后及御子等、於其小竹之蒨、棧雖足、跣破、忘其痛、以哭追、此時歌曰、中又飛居其磯之時、歌曰、波麻都知登理、波麻用波由迦受、伊蘇豆多布、

〔古事記傳 二十九〕此御歌は、先濱つ千鳥とは、下に濱云々、磯云々を云む料に、かの白智鳥を、千鳥